

# 坂本龍馬の「いろは丸」

## - 第4次調査から -

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



調査海域に繫留した調査台船（背後の山は庄内半島の紫雲出山）

慶応三年（1867）4月19日、坂本龍馬の率いる海援隊は蒸気船「いろは丸」を仕立て、大坂へ向けて長崎を出港しました。ところが4月23日の深夜、瀬戸内海の備後灘で紀州藩の蒸気船「明光丸」と衝突し、沈没しました。これが後に「いろは丸事件」として幕末史をにぎわす海難訴訟事件へと発展することになります。

およそ100年後の1989年、いろは丸は鞆の浦の有志で結成された「鞆を愛する会」によって発見されました。その後、京都の水中考古学研究所が3次にわたって調査を実施し、船体を確認、滑車や陶磁器類などを引き揚げました。そして、2005年夏、第4次調査の計画が持ち上がり、当研究所が調査に加わることとなりました。

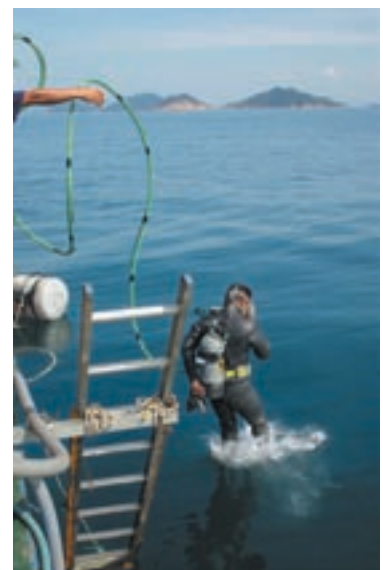
いろは丸は備後灘の東端、広島県福山市沖の海底に沈没しています。ここは南東に香川県の庄内半島が間近に望め、東の彼方には、瀬戸大橋もかいま見えます。

調査は、海上に繫留した調査台船を基地として実施しました。ここからダイバーが潜水し、エアリフトと呼ばれる掃除機のような機械で、海底に埋没した船体を掘り起こしていきます。

しかし、実際の調査には多くの困難が待ち受けていました。まず、この地点は1日に数百隻が行き交う瀬戸内海でも有数の海上交通銀座です。調査台船を繫留したままにしておけないので、毎日片道2時間かけて鞆の港から運ぶ必要があります。その上、調査中は常に警戒船で周囲を見張らなければな

りません。

次に、27mという水深が立ちほだかりました。水圧の関係からダイバーの潜水作業時間は1回40分、1日2回が限度です。しかも、作業後は水中で約20分間減圧をしなければ浮上できません。



潜降を開始する調査ダイバー



写真1 ボイラーパイプの状況

さらに、海底付近はほとんど視界がありません。視界のよい時でも、伸ばした指先がやっとみえる程度です。掘削すると濁りのために全く見えません。まさに手探りの作業です。

しかしながら調査スタッフの粘り強い努力によって、徐々に船体の状況が明らかになってきました。船体の中央部にはボイラーと見られるパイプが確認できました。陶磁器や真鍮製の部品も見つかり始めました。そして調査も終盤になったとき、ついに船尾と思われる部分に到達しました。これまでの調査で船首を確認しており、これで船体の規模がわかりました。

次はこれを記録する作業です。視界がほとんどないので、写真による記録も調査員による実測もままなりません。そこで、最新の海洋測量・探査技術に頼ることにしました。マルチビーム音響測深器は音波を利用して海底の状況を図化する機械です。またGPSは人工衛星を利用して位置を確定する機器です。これらを利用して、船体の状況を記録することに成功しました。

遺物も多数見つかりました。帆



写真2 船尾付近の船体外板

桁などの船材、滑車などの船具、ドアノブやフックなどの調度品、陶磁器の碗・皿、ワインボトル、革靴、硯箱などの日用品、鮫皮の台座、朱入りの箱などの積み荷です。これらはまさに和洋折衷、幕末日本の縮図を見るような遺物群です。

今回の成果は、いろは丸の積み荷の一部が明らかになったことです。一つは刀の柄などに用いられる鮫皮、もう一つは、顔料などに用いられる水銀朱です。いずれも長崎貿易による海外からの輸入品で、長崎から大坂へ運ぶだけで大きな差益を生む品として知られています。海援隊の目指した交易の一端を垣間見ることができました。

もう一つの成果は、積まれていたとされる小銃が全く見つからなかったことです。いろは丸事件で海援隊側は、当時最新式のミニエー銃400丁を積載していたと主張し、船体に匹敵する莫大な補償費を得ています。しかし、調査では小銃あるいはその部品すら見つかりませんでした。この事実は、いろは丸事件の裏に隠された真実を物語っているのではないのでしょうか。

吉崎 伸



引き揚げられた遺物

積み荷の鮫皮台座（左）と朱を入れた箱の部材（右）

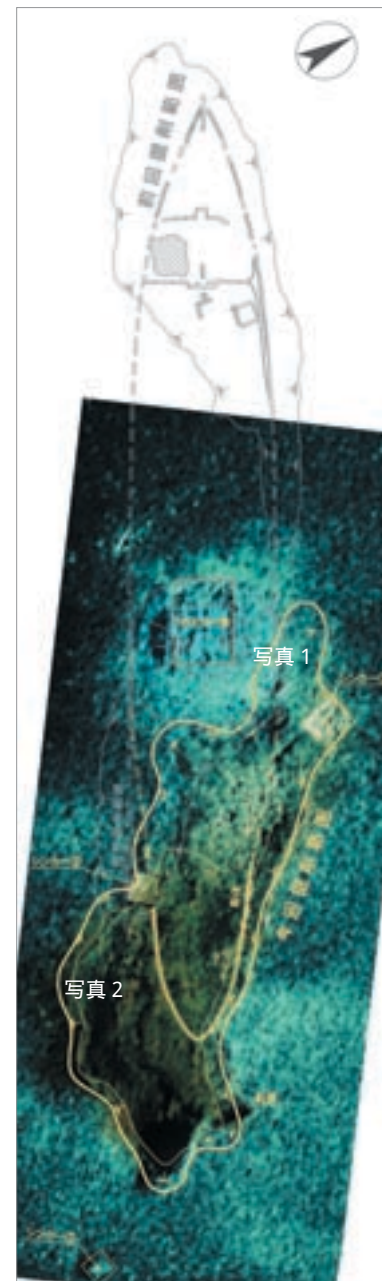


写真1

写真2

船体検出状況と解釈図（1：300）  
マルチビーム音響測深器による画像